

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告

中国江蘇省および陝西省における川崎病の疫学調査成績

分担研究者 中村好一 自治医科大学教授
分担研究者 柳川 洋 埼玉県立大学副学長
研究協力者 張 拓紅 北京医科大学講師

研究要旨 中国江蘇省および陝西省においてわが国と同様の方式で川崎病の疫学調査を行い、中国における川崎病の疫学像の一端を明らかにした。

A．目的

中国で発生した川崎病患者を早期に診断し、適切な治療を実施することにより、予後の改善に役立て、健康な生活を営むことができるようになることを目的として、日中両国の研究班が協力して、中国の調査対象地域における川崎病罹患の頻度、分布およびその他の疫学像を明らかにする。さらに、中国の調査対象地域および日本国の川崎病の疫学像を比較し、相違点と類似点を明らかにする。

B．研究方法

調査対象地区として経済発展地域（江蘇省）、内陸の発展途上地域（陝西省）の2か所を選定した。

（1）対象病院のリスト作成

対象地域内の医学院附属病院、小児専門病院、小児科病床を有する県市レベル以上の総合病院のリストを作成する。病院リストに含める項目としては、病院名、病院住所、病床数である。

（2）調査票の発送と回収

調査依頼状、調査票、診断の手引き、返信用の封筒を同封して対象施設の責任者（小児病院の場合は院長、総合病院の場合は小児科部長）宛に送付した。

依頼状は中国で作成し、できるだけ回収率をあげるよう努力した。調査票、診断の手引きの中国語版は原案を日本で作成し、両国協議の上同意したものを使用した。

調査票の返送期限は調査票送付後1か月

程度とし、患者がいない施設についても、調査票の返送を依頼した。

（3）回収施設の確認

調査担当責任者は、対象病院のリストに基づき回収施設の確認を行った。

（4）未回収施設に対する再依頼

調査票回収期限後1か月以内に、未回収施設に対する再依頼を行った。

（5）調査票記入状況の確認

調査票を回収したらその都度、調査票記入状況を確認し、記入漏れがある場合は、できるだけ早く該当する施設の担当者に郵送または電話による問い合わせを行い、記入漏れによる不明の項目をできるだけ減らした。

（6）調査票の内容

調査票の内容は、日本で実施している調査項目の一部および診断の手引きに示してある各主要症状の有無とした。調査項目は以下のとおりである。

カルテ番号、患者氏名、患者住所（県、鎮・郷まででよい）、性、生年月日、初診年月日、初診時病日、主要症状の有無、死亡の有無。そのほかに施設に関する基本的な情報（小児科のベッド数、年間の小児科外来・入院患者数）も同時に収集した。

C．研究結果

調査施設は江蘇省197病院、陝西省150病院で、調査票の回収率はそれぞれ49.7%、70.0%であった。患者を有する施設は江蘇省77

(39%)、陝西省56(37%)であった。年間の川崎病入院患者数はそれぞれ509人および347人、罹患率は江蘇省1.85、陝西省2.16(5歳未満の人口10万対年間)であった。江蘇省、陝西省とも5歳未満の人口数が年々減少しているが、罹患率は年々増えてくる傾向が観察された。3歳未満の患者は江蘇省で全体の58%、陝西省で69%を占めていた。男女比は、江蘇省の1.83:1に対して、陝西省で1.60:1であったが、年齢によって異なり、年齢の高い患者ほど男女比が小さくなっていた。罹患時年齢を見ると、江蘇省も陝西省も0歳後半から2歳未満までに患者が集中していた。罹患の季節は、春に多く、秋には少なかった。心後遺症がある症例は13.6%(江蘇省)および19%(陝西省)であった。江蘇省の心後遺症は動脈瘤(4.5%)右冠動脈拡大(2.9%)、左冠動脈拡大(4.9%)、巨大動脈瘤(1%)および心筋梗塞(0.2%)であったが、陝西省では冠動脈拡大、狭窄および冠動脈瘤が存在したが、巨大動脈瘤や心筋梗塞などは見られなかった。致命率は江蘇省0.4%、陝西省は1%であった。初診病日は4~7日が多かった。主要な症状としては、発熱、口腔所見および頸部リンパ節腫脹が多くの症例で観察されていた。江蘇省では確実例が96%で、容疑例は4%以下であったが、陝西省で確実例82%、容疑例18%であった。

D . 考察

江蘇、陝西両省の川崎病罹患率は日本のを約50分の1であるが、川崎病はすでに主要な後天性心疾患として、しばしば外来で観察されている。中国の医師は川崎病を徐々に認識してきており、多くの川崎病患者を入院させている。日本の疫学像と比べて共通点が多く見られるが、男女比や初診時年齢などは異なっていた。心後遺症の割合が地域によって異なることは、発展途上地域の住民における川崎病に関する知識不足などによることも考えられる。また、世界各地から報告される川崎病症例の年齢構成はほぼ一致しており、今回の結果と併せて考えると、中国においては年少の川崎病が見逃されている可能性もある。今後、臨床観察を含んだ疫学研究を進める予定である。

E . 結論

わが国と同様の方式によって川崎病の疫学調査を中国においても実施し、その疫学像の一部を明らかにした。

F . 研究発表

1 . 論文発表(該当なし)

2 . 学会発表

張拓紅, 中村好一, 柳川洋 . 中国江蘇省および陝西省における川崎病の疫学調査成績 . 第10回日本疫学会学術会(2000.01.27, 米子), Supplement to Journal of Epidemiology 2000; 10(1): 80

G . 知的所有権の取得状況(該当なし)